

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第127号

令和3年4月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

斎藤監物作 児島高德桜樹に書するの図に題ス

おかやま人物往来④⑤ 児島高德

— 全国3か所に残る墓 —

● 一貫して南朝を支えた児島一族 ●

太平記に有名なくだり、隠岐に配流される後醍醐天皇を救おうと院の庄の行在所に潜入し、桜の木を削り「天莫空勾踐 時非無范蠡」と刻した児島高德。

岡山県総合文化センターニュース (NO. 411 平成10年12月10日) に、「おかやま人物往来④⑤児島高德」を見つけましたので、転載します。

「天莫空勾踐 時非無范蠡」

鎌倉時代最末期の元弘2年(1332)3月、児島高德は隠岐へ流される途中の後醍醐天皇を奪回しようと、その後を追ったが果たせず、せめて志だけでも伝えようと、天皇の宿所に忍び込んで、庭の桜樹の幹を削って中国越王勾踐の故事に因んだ十字の詩を書いたという。この話は院の庄の忠臣児島高德の故事として知られ、すでに江戸時代の貞享5年(1688)には、津山森藩の家老長尾勝明がこれを顕彰して

いんのしょうのこしふみ
「院庄胎文」を著している。

児島高德は不思議な人物である。「太平記」にはしばしば名前が見えるのに、他の資料にはその名を見ることがない。このため、児島高德は「太平記」の著者とされる児島法師と同一人物ではないかという説がある。

児島高德の名は「太平記」(全40巻)の巻4から巻31、元弘2年(1332)から観応3年(1352)までの20年間の記事に見える。

高德は和田備後の守範長の子で、「太平記」の中では、児島備後三郎高德、児島備後三郎、児島三郎高德、児島備後守高德、三宅三郎高德、今木三郎高德など、さまざまに記され、最後は出家したのか、児島三郎入道至純と名乗って終わる。

「太平記」では、今木・大富・和田氏を近辺の親類といい、「児島ト河野トハ一族ニテ」という。また、巻17「江州軍事」に児島・今木・大富が兵船を揃えて上洛する記事が見えるから、高德は和田・今木・大富氏や伊予の河野水軍とも同族関係にあり、瀬戸内海に足掛かりを持っていたと考えられる。大富・今木氏は豊原荘(邑久郡)の地頭であった。

ところで、高德の行動には一定のパターンがあることが指摘されている。単独か少数での行動が多く、偵察・攪乱・連絡などがその任務であったように見えることである。その意味で注目されるのは、巻24の「三宅・萩野謀反の事」での高德の動きである。

児島に隠れていた高德は將軍らを暗殺しようと海路京都にのぼり、廻し状を回して味方を集め、四条壬生の宿に隠れて機会をうかがう。

この時、高德の配下にいたのは「くつきょう究 竟ノ忍ビ」であり、彼らは「元来死生不知者共」であった。これは高德が忍びの統率者であったことを思わせるが、高德の拠点が児島にあり、児島が五流山伏の本拠であったことを考えると、高德は修験道に関係した人物であったことが推測されるのである。

倒幕の過程で、後醍醐天皇方に付いた備作地方の多くの武士が南北朝の内乱期に北朝側に転じて生き延びたのに対し、一貫して南朝方にいた児島・今木・大富・和田氏は早く歴史の舞台から姿を消していった。

児島高德について書かれた図書は多い。いちいち上げないが、このうち、特に、「太平記」以外の周辺資料によって児島高德を实在の人物とした藤井駿の論文集「吉備地方史の研究」や高德の行動パターンを指摘した「津山市史第2巻 中世」は必読の書であろう。

斎藤監物作

児島高德桜樹に書するの因に題す

破千山萬嶽煙 鸞輿今日到何邊

蓑直入虎狼窟 一七深探鮫鰐淵

國丹心嗟獨力 回天事業奈空拳

行紅淚兩行字 附與櫻花奏九天

(積文)

せんざんぼんがく らんよこんにちいず へん いた
踏み破る千山万嶽の煙鸞輿今日何れの邊にか到る

たんさただ い ころう いわやいっぴ さぐ こうがく ふち

單蓑直ちに入る虎狼の窟一七深く探る鮫鰐の淵

どくりよく なげ くうけん いか

報國の丹心獨力を嗟き回天の事業空拳を奈んせん

すうこう こうるいりょうぎょう おうか ふよ きゅうてん そう

數行の紅淚兩行の字櫻花に附與して九天に奏す

(解説)

児島高德は、後醍醐天皇が隠岐に潜幸されるのを奪還しようとして果たせず、院の庄（現在の津山市）の行在所に潜入し、桜の幹を削り、(天莫空勾踐 時非無范蠡)との二行の詩句を書し、自分の微衷を奏上した故事を素材にしたもの。

元弘2年(1332)3月、北条氏のため隠岐に流される後醍醐天皇を途中で奪還しようと、児島高德は義兵を集めて船坂峠で待ち構えたが、鸞輿は他の道を通り、義兵たちは四散した。

やむなく高德は単身、行在所に忍び、警護の目をかすめて、庭前の桜の木の皮をはぎ、「天莫空勾踐 時非無范蠡」の詩を書きつけた。

この史話の忠誠を讃えつつ、同時に作者自らの心情を詠じたもの。

文部省唱歌「児島高德」

一 船坂山や杉坂と

み

御あと慕ひて院の庄、

びちゅう

微衷をいかで聞こえんと、

桜の幹に十字の詩。

こうせん わな なか はんれい あら

『天勾踐を空しうする莫れ。時に范蠡無きにも非ず。』

みこころ

二 御心ならぬいでましたの

みそで あさと で

御袖露けき朝戸出に、

ずん え

誦じて笑ますかこさよ、

桜の幹の十字の詩。

『天勾踐を空しうする莫れ。時に范蠡無きにも非ず。』

この歌は、「尋常小学唱歌(六)」「(大正3年6月)に掲載され、昭和7年の「新訂尋常小学唱歌」まで掲載された、とのこと。この歌のメロディは、「なつかしい童謡・唱歌・わらべ歌・歌謡・寮歌・民謡」というwebサイトで聞くことができる。

児島高德の墓

その1 伝・児島高德の墓 / 米子市ホームページより

伝・児島高德の墓 米子市岩倉町・涼善寺

昔の人は、歌いながらこんな具合に謎掛けをしたそうです。「なぞなぞ掛けます解かしやんせ」「知りたるなぞなら解きますが、知らないならあげて聞く」「それでは私が掛けましょう。児島高德と掛けて何と解く」「よう掛けしやんした解くわいなあ、鉛筆削りと解くわいなあ」「よう解かしやんした、お心は?」「どっちも木を削って文字を書く」

写真:涼善寺(岩倉町)にある児島高德の墓



その2 赤穂市坂越観光・旅行見所ナビ より

児島高德は備前国児島郡の出身で、鎌倉時代末期から南北朝時代に倒幕、南朝側の武将として活躍したとされる人物です。→ 写真中央の五輪塔形式の墓石が高德の墓で、「児島 高德卿墓」と命名されている。

この場所の上には「白勢稲荷」があり、その東側に「妙見寺」がある。



その3 群馬県大泉町 / Tigerdreamの上州まったり紀行 HPより

伝・児島高德の墓 一 高德寺一

邑楽郡大泉町古海の医王山高徳寺。高德寺は後醍醐、後村上、長慶天皇と、南朝三代の天皇に仕えた児島高德の開基で、晩年を過ごしたと伝わる。

一般的には、児島高德の生没年は不詳とされているが、高德寺の由緒版では、1311年

(元号記載なしだが、延慶4年/応長元年)生まれで、永徳2年(1382年)72歳で没したとある。

高德寺から100mくらいのところに、児島高德の墓がある。(高德寺の墓地なのかは不明。)

(文責『四條啜楠正行の会』代表 扇谷昭)

